



沢内バーデン会場のオープニングは、みちのくみどり学園生による「いのちの鼓動」



満席で熱心に聞き入る沢内バーデン会場

多彩に50年を検証

深澤精神 継承誓う

深澤晟雄の会、輝け「いのち」ネットワークの両NPO法人中心の実行委員会主催で、7月22日「乳児死亡ゼロ50周年の集い」が開かれました。参加者は鹿児島県など県内外から180人と主催者の予想を上回る盛況でした。深澤晟雄資料館前の式典では、元沢内病院長の加藤邦夫氏と増田進氏に「いのちの灯文化賞」が贈られ、

「乳児死亡ゼロ」に貢献した次の5氏に特別賞が贈られました。

小児科医師の故石川敬治郎氏、保健婦の高橋ミヨ氏、助産婦の照井フミ、深澤スミ、柿沢アイの各氏。

沢内バーデン会場では、元病院長の両氏は深澤生命行政に思いを馳せて「歴史の証言」で当時を語りました。また「50年の歩み」を町の北島保健師が報告



し、「生命行政に学ぶ」では看護・保健師の養成大学等の教師2氏の発表などで50年を検証しました。

「いのちの行政を今に」では「写真右」昭和37年生まれで新町出身の盛島徹さんは「自分はずいぶん村に生まれたことを誇りに思い感謝している。『命を大事にすること』を子どもたちに伝えていきたい」と述べました。その子世代の西和賀高校3年山中希望さんは「命を守る」深澤村長の遺志を受け継ぐ医療従事者になるため、今を大切に生きたい」と語るなど、二世代から感銘深い発言が相次ぎました。

記念講演で本田敏秋遠野市長は「命を守る」という深澤イズムは今こそ求められているし、まだまだ多くの人の心に生き続けている」と強調しました。

集いは山中紅香さんの講演「いのちの山河」、戸山光子さんとコーラスリシヤンの「深澤晟雄を讃える歌」で閉会しました。

金一封に感謝

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 遠野市 | 陸前高田市 | 宮城県 | 三重県 | 花巻市 |
| 本田敏秋様 | 千田和可様 | 加藤邦夫様 | 伊藤恵一様 | 伊藤幸雄様 |

深澤晟雄の会への金一封です。ありがとうございました。

村田源一朗氏(岩手日報社相談役)に聞く ②

「書かざるの記」と

深澤村長の記憶

聞き手／深澤晟雄の会副理事長 佐々木 孝道



＜村田源一朗氏略歴＞

村田氏は新聞社の経営に携わる一方で、文学賞や地域貢献事業を創設し、本県の社会文化事業に貢献した。また、民間団体活動では日本ユネスコ協会、日本赤十字社、岩手県国際交流協会の役員等を通じ、人命尊重、国際社会、地域社会への奉仕活動を行っている。さらに、本県行政の各種審議会委員を歴任し、県勢発展と県民生活の向上に貢献された。



ベッドに横たわる麻薬中毒医師に「それでもお前は医者か！」と怒る深澤村長(左から2人目。映画「いのちの山河」より)

「間違いあった」と

トップ記事降ろす

佐々木 それで、結局は書いた原稿を本社に送らずにボツにしたのですか。

村田 そうはいきません。本社では翌日夕刊のトップ記事で扱うといっているし、僕もそのつもりで原稿を書いていたんです。次の日の朝、僕は原稿を本社に送って電話を置いた9時半ごろでした。再び晟雄さんがきたのです。晟雄さんの後ろに4、5人の村人たちが一緒でした。この村人たちの家族が「証拠も何もないのですが、麻薬の医者 of 誤診で亡くなったと言われている。その家族の方々が、ぜひ村のために記事にしないでほしい」と懇願するよう話すのです。

これには、僕も胸を打たれましたね。それで本社に10時ごろでしたが、「あの記事に間違いがあるから、すぐ降ろしてくれ」と電話したんです。もちろん、特に間違いがあるわけではないが、トップ記事だけにそれでも言わないと本社では降ろさないわけです。それで降ろしてその

ままになったんですよ。

佐々木 その経緯を書いたのが、村田さんの「書かざるの記」だったんですね。それが、及川和男さんの目に触れて、知られるようになったというわけですか。

村田 時が移って私が編集局長になった当時、編集局内外には出さない「編集月報」があつてね。編集局長が毎月巻頭言を書くんですよ。その時僕は新聞週間のときだったので「書かざるの記」と言うタイトルで、「書くことは新聞記者の仕事だが、書かないことも多かったこと」を巻頭言に書いたんですね。

書かないことが世の中の為になるケースのあることを、沢内村長との一件を例に書いたのです。そうしたら、僕の書いたのが一関支局のテーブルの上に乗っていたのを彼(『村長ありき』の著者・及川和男氏)が見たんでしょうね。彼はそれを見て沢内に行って直接取材をして書いたんですね。それで一気に知られるようになったんです。簡単に言えば、全貌はそういうことです。

つづく